

清潔な顔ってどんな顔？

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

「清潔な顔になろう」と言っても、そもそも清潔な顔ってどんな顔なんだと言われてしまいそう
だ。あの人は「いい顔」をしているとはよく言うが、「清潔な顔」をしているとはあまり言わない。

「キレイな顔」「美しい顔」という言い方もあるが、「清潔な顔」というと、日常的な用法からは
ちょっとずれた、何か特殊な意味を担ってしまうようにも思われる。

風呂あがりや、昼間の汚れをさっぱり洗い落とした「清潔な顔」といったような、純粹に物理的
な使い方だったらよく分かるのだが、少しでも精神的な要素が加わると、とたんに分かりにくくな
る。

しかし、この語が精神的な意味でのヨゴレの無さ、心がキレイとか美しいと言われる状態をも示
していることは誰もが感じており、その意味で使っているほうがむしろ多いとさえ言える。

「清潔な顔」というのは、単に洗い立てで汚れのない、除菌された状態を意味するばかりでなく、
目の輝きとか、表情の良さとか、微妙な感情表現に関わってくるのである。それだからこそ、そも
そも清潔な顔とはどんな顔なのかということが問題になるのだとも言えよう。

清潔な顔は「美しい顔」とも異なる。この世には美男美女がたくさんいるから、美しい顔に出会
うこともそれだけ多くなる。しかし、それが必ずしも清潔な顔だというわけではない。清潔な顔と
言えるものには滅多にお目にかかれないと言ってもよいだろう。

「清潔感のある顔」という言い方はよくされる。つまり、清潔な感じのする顔ということだが、
これは、文字通りの「清潔な顔」とはややニュアンスが異なっている。そのような感じがするとい
うだけで、真にそうだと断定しているわけではない。

以前に、このブログ・マガジンでも、「ハンカチ王子の清潔感」と題して、その清潔感が何を意味
するのか問題にしたことがあった。ハンカチ王子の魅力は何かと聞かれた女性たちが、「クール」と
いう言葉とともに「清潔感」という言葉を口にしたからである。

最初に思い浮かべたのは、「色白」ということだったが、それは必ずしも清潔感に結びつく性質で
はないこと、例えば、日に焼けた浅黒い肌にも清潔感があること、逆に、色白は、場合によっては
病的に見えることなどを考えれば、色白イコール清潔感という等式は成り立たないのである。

(このブログに対して、或る女性から、清潔感のある顔とは「脂ぎっていない顔」を言う場合も
あるという意見が寄せられた。脂ぎって、キメの細かさを感じさせる顔だということだ。父親
の脂ぎった顔がキライだと言う娘たちもいるという。この指摘にはたいへん興味があるので、後日
考えてみることにする。)

色が白いか黒いということには関係なく、むしろ「顔立ち」の良さに清潔感があると考えられることもできる。このことは、清潔を「整理・整頓」のように考える欧米風の清潔感とも一致するであろう（ブログ「名探偵モンクは清潔マニアだ」参照）。

目鼻立ちが良いとか、バランスが整っているなどといった造形的な美しさに清潔を求める方向なのだが、実は、そういう造形的な美しさを越えた所に、清潔さがあるとも言えるのだ。

どんなに顔立ちが整っていても、よくよく見ると、人間的な何かを感じさせないような顔はない。欲望が目に見えていたり、口元に漂っていたり、表情を変化させたりする。そこには造形的な美とは異なる何かがあるのだが、それが人間をイヤな感じにしたり、また逆にイイ感じにもするのだ。

例えば、左右対称で均斉の取れた口が必ずしも清潔を感じさせるわけではなく、人間のさまざまな欲望を思わせずにはいないということもある。得意絶頂になると、口をへへの字に結ぶ癖のある男を知っている。それは彼にとって最良の表情なのだが、最高に傲慢な顔でもあるのだ。

逆に、もともと左右非対称でひどく歪んだ口の持ち主なのだが、この男が口をへの字形に曲げて喋る時には、けっこうスカッとした爽快なものを感じさせる。これは、彼が長年の努力で積みあげてきた精神的なものが、その口を突いて出てくるからであろう。

ハンカチ王子の清潔感とは、必ずしも顔のことを言ってるわけではなく、結局、彼がハンカチを取り出して汗を拭いたりする態度や全体的な雰囲気「イイ感じ」だということ、ほとんど感嘆詞に近い使い方だということ述べたのであるが、清潔という言葉の原点をその辺で押さえておいてもよいであろう。

清潔な顔とは、「イイ感じ」な顔なのである。それは単に顔を洗っただけだからイイ感じだというのではなく、精神的な蓄積が反映して作られたイイ感じだと言わなければならない。

清潔なイイ感じの顔はまた、この世の欲望をことごとく排除して造られるものでもない。欲望は人間にとって本質的なものである。欲望の追求なしには人間は生きられない。

ただ問題は、欲望の主人になるか、奴隷になるかの違いであろう。欲望を支配しようとする自己制御の戦いと、精神的な修練の中でこそ、イイ顔が造られていく。

ひたすら勝利を目指し、相手を倒すことを欲し、それに全身全霊を傾けるスポーツマンの、あの鋭い目のうちに、私たちは時とすると或る種の清潔感を見いだすのはなぜだろう。

それは、このスポーツマンが長い修練の中で、戦うことの意味を知り、他者に勝つことの意義を悟り、自己を支配することを学んだからではないだろうか。それが目に現れているのである。

前回のブログで、私は、この世で最も清潔な顔の持ち主と言われるイエス・キリストについて触れた。イエスも決して欲望を忘れてはいなかった。そして、欲すれば与えられることを身をもって教えたのである。

私たちが欲すれば、清潔な顔が与えられる。見る人が見れば、その顔は九割どころか十割の価値さえ持つだろう。しかし、「見た目」に騙されやすい大多数のためには、言葉を用いなければならぬ。

「見た目は十割、しかし言葉も十割」なのである。この関係については、稿を改めて述べることにする。

イエス・キリストの「見た目」は、彼から言葉を除いたらゼロになるように、私たちの「見た目」も、それを造り出した精神が言葉によって表現されないかぎり、人々の心に真に伝わることはないであろう。

[2007/09/24 magmag]